

「京都府南部弱視学級等担任向け研修会」

ねらい

- 京都府南部の弱視学級等担任同士の連携を図り、弱視児童生徒を地域で支えるネットワーク構築のひとつの機会とする。
- 弱視学級等担任が弱視教育の基礎と発展を学ぶ機会とする。
- 第1回は視覚障害者の将来の姿から、学齢期の生活と教育について検討することを目的に設定した。
「学齢期を振り返って」 中村律子氏
(大和ハウス工業株式会社 経営管理本部人事部人事厚生グループマッサージ)
- 中村氏が学齢期に感じておられたこと、今振り返って考えておられることをお話いただいた。(参加者の感想は以下の通り)

教師も保護者も、「その子の将来」を見通して支援をしていかなければならないのに、今は「その時」のことだけしか考えられていなかったと反省しました。

具体的な経験を話して下さり、少しだけ弱視の児童の気持ちになれた気がします。さりげなく支えたり、ぐっとよりそったりしながら児童の成長を見守っていきたいと思います。

- 第2回は、「学習上の配慮」の講義の他、「具体的な指導内容」として、家庭科の授業(裁縫)を擬似体験した。弱視シミュレーションレンズを装用して担任している児童の視力に近い状態での授業体験ができた。また、次年度の引き継ぎに関わって、そのポイントを、「個別の指導計画」の作成とあわせて取り組む内容で実施した。
- 弱視体験を行うことで、担任する児童の不便さも実感しながら、具体的な指導上の配慮について深められた。(参加者の感想は以下の通り)

実際に子どもの視力になって体験することで、子どもが感じている困り感がよくわかりました。普段からたくさんたくさん頑張っていたんだなと改めて感じた研修でした。

「個別の指導計画」作成については、特に悩むところだったので、ぴったりの内容でした。具体的な場面に限定してねらいをはっきりさせるという考え方には納得しました。

- 少数しかいない弱視学級等担任の「横のつながり」を作ること、成人された視覚障害者の講演や「個別の指導計画」研修を通して、児童の「縦のつながり」を考えること、また相談できる場の保障という意味で、開催の意義は大きかった。本研修の成果を次年度にも活かし、継続実施する予定。